
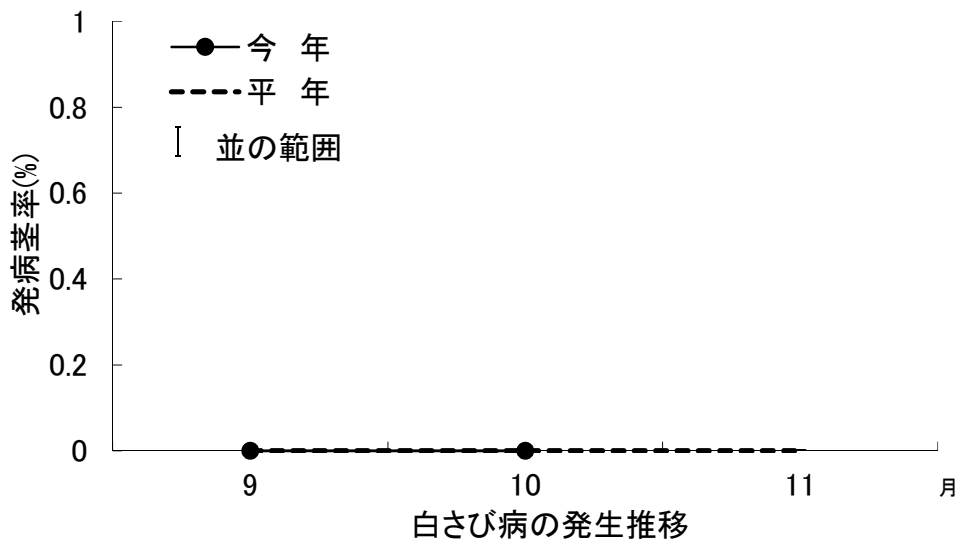



作物	小ギク(年末出荷用)	地域	沖縄群島
病害虫名	白さび病		
10月の発生量(現況)	(発生なし)並		
11月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	発病茎率の平年の発生推移から、10月と同程度の発生量と考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)

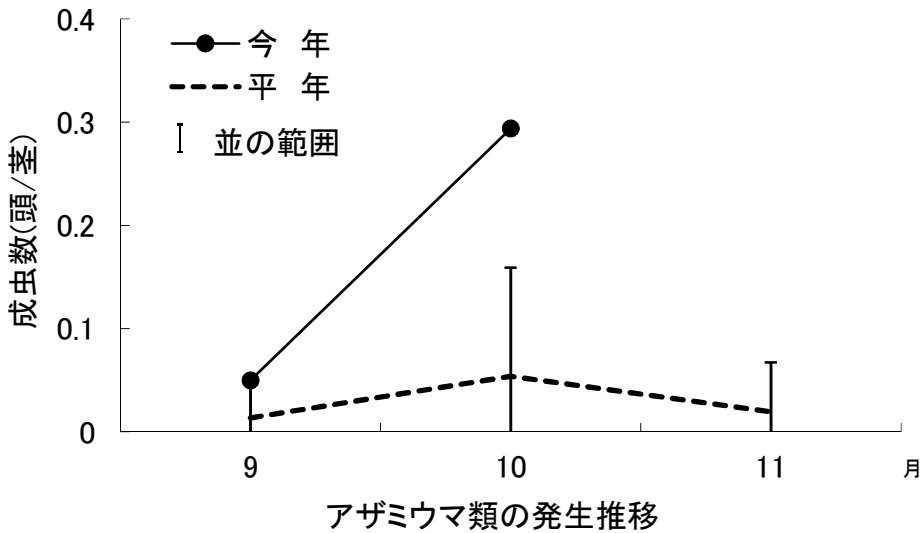


防除のポイント

- ・多湿条件下で発生するので、不要な下葉、脇芽は除去し、通風をよくする。
- ・発病葉は除去し、ビニール袋に入れるなどしてほ場外に持ち出し、焼却などの処分を行う。
- ・発生時期には予防散布を行うとともに、葉をよく観察し初期発生を見逃さない。
- ・防除効果を高めるため、薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布を行う。
- ・栽培終了後は近隣ほ場や次作の発生源にならないよう、不要な株は速やかに処分する。

作物	小ギク(年末出荷用)	地域	沖縄群島
病害虫名	① アザミウマ類		
10月の発生量(現況)	やや多		
11月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	成虫数の平年の発生推移から、10月と同程度の発生量と考えられる。		


発生量の根拠(調査結果)



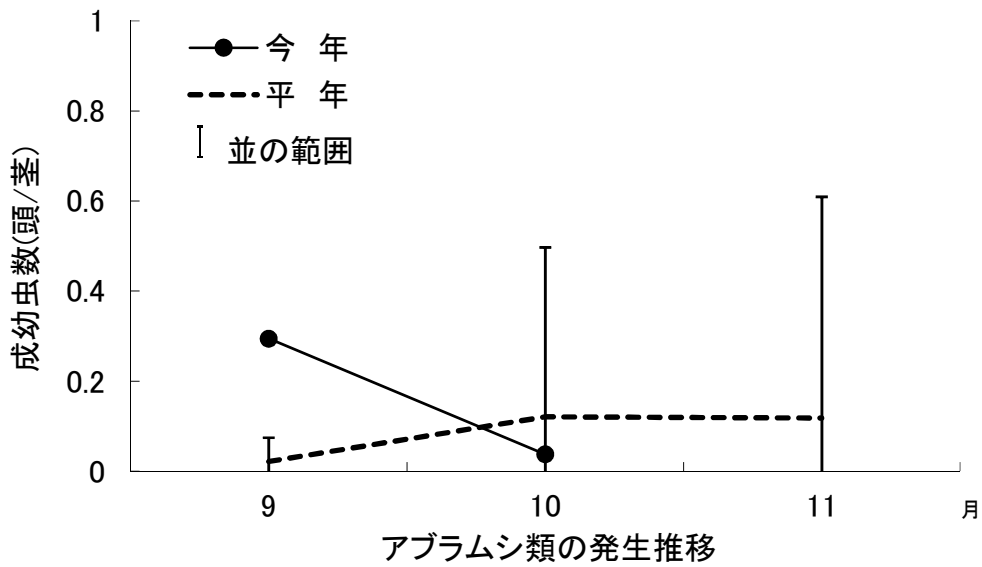
発生種は、クロゲハナアザミウマであった。
防除員の報告：中発生(久米島)

防除のポイント

- ・ 苗の段階から葉にアザミウマがついていることが多いので、苗床での防除を徹底する。
- ・ 定植時に粒剤を施用する。
- ・ 採穂後の親株ほ場はアザミウマの発生源となるため、薬剤散布後、すみやかに片付ける。
- ・ 成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
- ・ 同一ほ場内にあるキクは、異なる品種、異なる生長段階であっても、同時に防除を行う。
- ・ 地際部から新しく出てきた脇芽は、アザミウマが増殖しやすいので、早めに除去する。


作物	小ギク(年末出荷用)	地域	沖縄群島
病害虫名	② アブラムシ類		
10月の発生量(現況)	並		
11月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	成虫・幼虫虫数の平年の発生推移から、10月と同程度の発生量と考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)

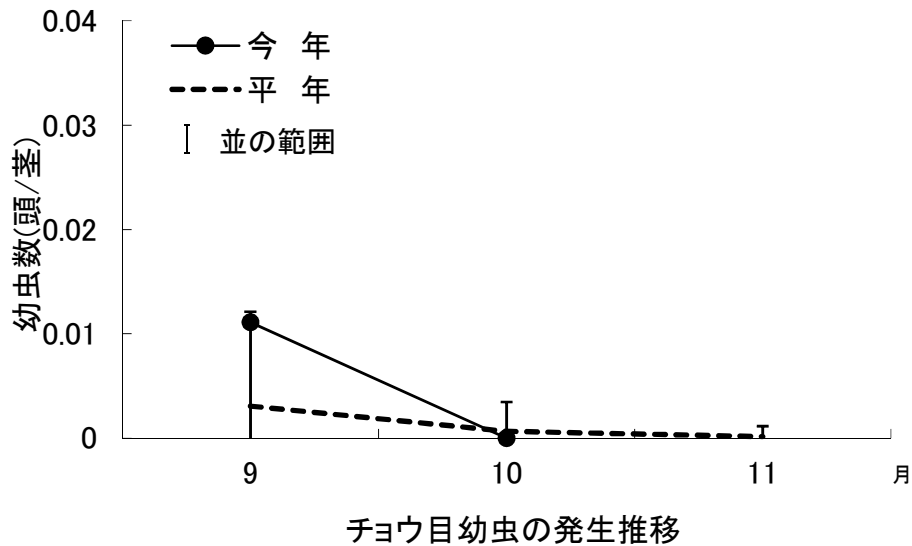


防除のポイント

- ・ほ場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- ・シルバーポリテープを畦上に張り出すか吊したり等して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- ・増殖が早いので、新葉や上位葉に多いことに留意し、早期発見・防除に努める。


作物	小ギク(年末出荷用)	地域	沖縄群島
病害虫名	③ チョウ目幼虫		
10月の発生量(現況)	(発生なし)並		
11月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	幼虫数の平年の発生推移から、10月と同程度の発生量と考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)

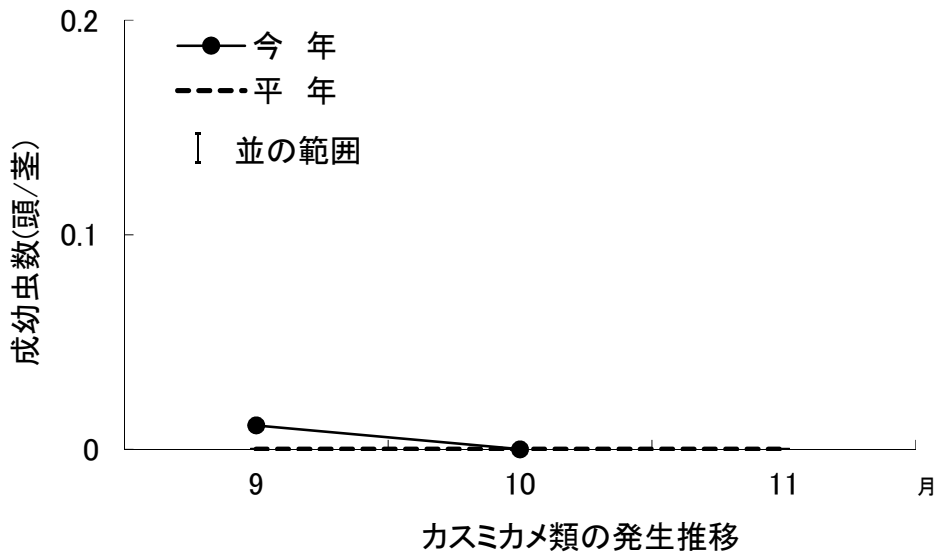


防除のポイント

- ・新しい食痕や虫糞をみつけたら近くに幼虫がいないか調べ、捕殺する。
- ・卵塊やふ化直後の幼虫の集団を見つけたら速やかに取り除く。
- ・中齢期以降は農薬の効果が低くなるため、早期発見に努め、若齢期に防除を行う。


作物	小ギク(年末出荷用)	地域	沖縄群島
病害虫名	カスミカメ類		
10月の発生量(現況)	(発生なし)並		
11月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	成虫・幼虫虫数の平年の発生推移から、10月と同程度の発生量と考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)

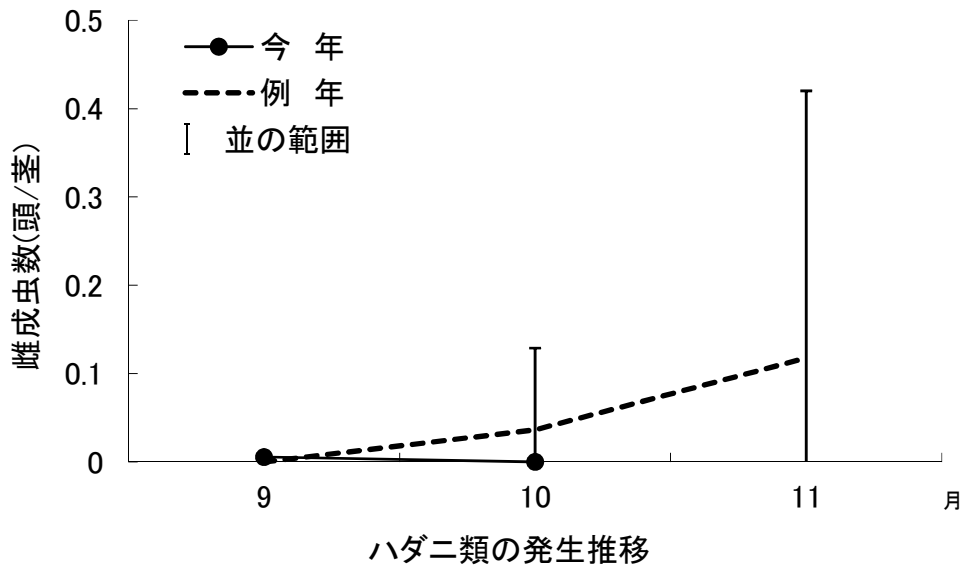


防除のポイント

- ・ 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。
- ・ 葉裏に多いことに留意しながら、丁寧に薬剤散布する。

作物	小ギク(年末出荷用)	地域	沖縄群島
病害虫名	④ ハダニ類		
10月の発生量(現況)	(発生なし)並		
11月の増減傾向	↗		
増減傾向の根拠	雌成虫数の例年の発生推移から、10月より発生量は増加すると考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)



防除のポイント

- ・ 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。
- ・ 葉裏に多いことに留意しながら、丁寧に薬剤散布する。